

あとがき

東日本大震災から、一年が経とうとしている。さまざまなメディアで特集が組まれたり、特別番組が編成されるのを目にしながら、いまなお時折やってくる余震に揺すられるたび、改めて意識されるのは、自分の感覚がいまでもすぐさま、あの三月十一日に戻ってしまうということである。体感した、ただごとでない揺れに繋がって、巨大な津波や原子炉のメルトダウンがあったこと、あのときから取り返しがつかない未曾有のところへ押し出されて後戻り出来なくなった感覚が、ちっとも風化しない。

むろん、夢中になってしごとをしたり、学生さんたちと大笑いをしているときなど、忘れて過ごす時もあるが、さりとてまる一日考えないでいるということはない。「どうしたらいいのか／どうしようもないじゃないか」という恐怖と不安、怒りや諦念を織り交ぜた感情が通奏低音のように、この一年の根底を貫いていた。

そのとき、そのときに応じて、自分に出来ることを少しずつ・・・と念じて送ってきた一年のはずだったが、改めて振り返ると、呆然とやり過ぎしてきた日々の堆積だったとも感じられ、忸怩たるものがある。この決して片付かない、後ろめたい思いも、不思議にちっとも風化していかないのである。

幸田文が関東大震災から四十四年目に、『科学朝日』という雑誌に求められて「大震災の周辺について」という随筆を書いている。向島の蝸牛庵にいて、市内から退避してくる人々を迎えた当時のことが、半世紀近く経つとは思えない臨場感漲る筆致で記されている。「文学の時間」を持つひとにあっては、体験は経年の風化とは無縁であることがよく解る文章だ。その中で、二十歳の文は露伴に「いつまでもオドオドしているのは、この際、あまつたれもはなほだしい。はた迷惑な」と絞られている。

絶対にけじめなどつかないことを抱えながら、それでも「あまったれ」ではいられないと自身に誓って、奮闘している。たくさんの人々を身近にしっかりと感じながら、二年目を生きていきたいと願っている。

(金井 景子)